

## 教育改革期のポジティブ・シンキング

茗溪塾塾長 宇野 雅春

何かをやろうと考えると、必ずストップがかかります。「そんなことをやったら大変な負担になる！」というのが一般的な反発です。でもこれはネガティブシンキングという事ではないかと思えます。リーダーシップを発揮しようとした人間に批判は集中するものです。結局は何もやらないでニコニコといい人であることが望まれているらしいのです。実際そういう風に生きていて誰からも「いい人」というレッテルは張られている人もいるけれど、私の立場でそのまねをすればそのうち「無能」というレッテルを張られるのは目に見えています。

塾が対面している世の中は今、「大学入試改革」から始まる教育改革の真っ只中です。いつまでもニコニコとやれることだけやっているわけにはいかないところに来ています。

英語改革の一環として始めている英語のアクティブスタディーも、やる前から「生徒が乗ってこない」とか「ペアワークの組む相手でもめる」とかのネガティブな意見も当初はたくさんありました。やってみたら全くそういう事はないのですが未だ乗り気でない人もいます。文法の基礎がしっかりできてから、英会話をすればいいというのも嘘です。文法をやればやるほど文章の正確さにこだわるようになり、しゃべることは困難になります。それに今の改革は、ただ「英会話ができるようになろう」という事ではなく、言語としての英語の理解とコミュニケーションツールとしての英語の「深い理解と活用」を目指しているものです。学んだことを実践的にアウトプットしながらの習熟がどうしても必要です。

ネガティブシンキングは、安心ゾーンにいつもいたい人たちの武器のようなものです。結局何もしなくて済むことがベストになるため、ありとあらゆる理由付けをします。

オンラインに至っては、違う言語を生活の中心におく外国人と会話するというだけでとても難しい体験なのですが、そもそも人とコミュニケーションなんて取りたくない年頃の生徒にとってはハードルの高いものなのでしょう。ただほとんどの生徒は、意義を感じてくれています。初めは聞き取りにくかった英語もだんだんクリアーにわかってくるという「耳」と「口」を活用しての英語学習の良さに気付いてくれていますし、実際、我々も生徒の習熟の速さには驚きを感じます。何でもやってみること、やり続けながら自分のレベルを上げること…それによって見える世界が変わってくる。ネガティブな考え方の根底には、「変わらない自分」がいます。ポジティブな考え方には「変わっていく自分」や「将来なりたい自分」がいます。AIが人間の大方の能力を身に着けてしまう時代の中で、人間自体が、別な意味で成長していかなければならないという事なのだと思います。若い生徒は柔軟で対応が速いものです。急激に変化を遂げることは間違いありません。問題は、指導する大人たちです。教育に携わる大人たちは、過渡的なプロセスの中でも、改革の意義を十分に認知し、次の世代を育てる覚悟を忘れず自己変革をしていくべきだと思います。それを支えるには何でもやってみようというポジティブな考え方が必要だと思うのです。